

ギaskellとバーボルドの社会観 ——ユニテリアン女性作家としての共通点

太田裕子

昨今の研究により英国の非国教会徒であるユニテリアンの文学的なつながりの意義が見直されている。本論考はエリザベス・ギaskellと、18世紀末から19世紀初頭に活躍し、ユニテリアン女性作家として先駆的であったアナ・バーボルド(Anna Barbauld, 1743-1825)に共通するユニテリアン女性作家としての特徴について考察するものである。ギaskellに受け継がれたと考えられるバーボルドのユニテリアン女性作家としての特徴とはどのようなものか。ユニテリアン文化に基づく両作家に共通する視点を作品から見出し、ギaskellの作品が持つユニテリアンの特徴を考察したい。

18世紀後期以降ユニテリアン主義は当時の中流階級の思想を代表し、ユニテリアン信徒が中心になり信条や教育の自由を訴え、「市民」としての権利を主張した。当時のユニテリアンは長老派ピューリタンの中でも、人間の自由意思を主張したアルミニウス主義の流れを受け継いだ人々が多い。知的分野で活躍した人が多いことで知られ、例えばリチャード・プライス、ウィリアム・ゴドウィン、S. T. コルリッジ、ウィリアム・ハズリットなどが挙げられる。ルース・ワッツによると彼らは当時の経済格差、宗教による職業・教育の規制、階層問題などの社会問題が、人的な原因によるものだと主張し、改革思想を展開したことで当時の英国政府から規制を受け、ことにフランス革命後1790年代には政府から危険視され弾圧された(6)。

このユニテリアンの中でも昨今はバーボルド、ハリエット・マーティノー、ギaskellらユニテリアン女性作家による社会への文学的影響の共通性が研究されている。例えばワッツは、

It was not only a question of fighting directly for women's rights: Unitarian women, as well as men, were prominent in such causes as anti-slavery and all sorts

of educational reform. Many leading female figures of the day either began as Unitarians or were drawn into the movement—for instance, Harriet Martineau, well-known sociologist and feminist . . . Elizabeth Gaskell, novelist. . . . It would be easy to give further examples, especially in the later nineteenth century with the fight for the suffrage and against the Contagious Diseases Acts. The circumstantial evidence certainly seems to indicate that Unitarians both actively strove to improve the lot of women and themselves provided role models of what women could achieve. (2)

と記し、ユニテリアン女性作家らが影響を受け合いながら、単なる女権の拡張運動だけではなく、社会問題たとえば奴隷問題や教育問題の解決のため、社会に対して重要な役割を果たしていったと指摘している。¹

更にキャサリン・グリードル (Kathryn Gleadle) は、19 世紀初頭公的言論領域 (public sphere) で活躍する女性が増加するようになると、ユニテリアン女性作家らを中心に、女性作家らが公的意味合いの強い政治的な作品を書く際に、政治論文という形式のみに頼らずに、詩、小説、書簡といったジャンルを利用するようになったと述べる (71)。アナ・バーボルドはそのような活動における中心的存在で、様々な文学的ジャンルを戦略的に用い、独自の宗教ネットワークや集会、更には児童書を通して、社会の改革を訴える言説を生み出していった。

ここでバーボルドについて概観すると、バーボルドは 1743 年レスター州にあるキブワースに生まれ、非国教会系の男子教育を行ったウォリントン・アカデミーの教師となるユニテリアン牧師ジョン・エイキン (John Aikin, 1713-80) の長女として生まれ、弟のジョン・エイキン (John Aikin, 1747-1822) とともに、父親から古典語をはじめとする教育を受けて育った。

1773 年最初の詩集 *Poems*、弟と共作のエッセイ集 *Miscellaneous Pieces in Prose* を出版、翌年結婚しユニテリアン牧師である夫と男子校を設立する。教育活動の他にジェイムズ・ジョンソンのもとで詩集、児童書、讃美歌集などを出版した。夫の死後 *Monthly Magazine* 誌の編集と執筆に専念し、更に奴隷貿易廃止を支持する詩などを出版する。1812 年 *Eighteen Hundred and Eleven, a Poem* を最後に詩を書くことをやめる。詩人としてだけでなく、散文家・教育者・批評家として名を馳せた。

バーボルドの父が教師を務めたウォリントン・アカデミーが閉鎖の後、その後身団体として設立されたマンチェスター・アカデミーでは、ギヤスケルの父ウィリアム・ステイーブンソンが教えていた。また、ギヤスケルの夫ウィリアム・ギヤスケルはこのアカデミーの後身マンチェスター・ニューカレッジで学んでいる。このように家庭環境的にもギヤスケルとバーボルドには共通点が見られる。更に興味深いことにギヤスケルはバーボルドの書いた子供向けの教育書に親しんでいた。バーボルドの教育書の第一作目である『子供への教え』(*Lessons for Children*, 1778-79)は幼児を対象にして書かれた作品で、J. A. V. チャップルやアンガス・イーソンの指摘にあるようにギヤスケルのみならずマーティノーも幼少時に読んでおり (Chapple 197, Easson 20)、ユニテリアンに直接関連する者だけではなく、社会全般に広まり 19 世紀末まで重版された。

ではギヤスケルはこの本を通してどのような教えを学んだと考えられるのか。この作品の特徴は、幼少の子供に無理矢理に、宗教教義を教え込むことではなかった。むしろ伝統的な教育書が重んじていた教理には全く触れずに、理性的に身の回りのことを教え、やがて世界全般の知識を体系的に学ばせることが重んじられた。以下はその例である。

Then the tree has branches! Those are like arms: They spread out very far. Then there are boughs; and upon the boughs leaves and blossoms. Here is a blossom upon the apple-tree. Will the blossom be always upon the tree? No, it will fall off soon: perhaps it will fall off to-night. But then do you know what comes instead of the blossom? What? The fruit. After the apple-blossoms there will be apples. Then if the blossom falls off to-night, shall I come here and get an apple tomorrow? No, you must have patience: there will not be ripe apples a great while yet. There will be first a little, little thing, hardly bigger than a pin's head. . . . (114)

ここで子供は植物について、身近なリンゴの木の有機的な成長から学ぶ。身の回りの知識や社会について有機的世界観が重んじられ、このような世界観をもとに小さな動物や貧民と自分との関連性を必然的に学ばせている。小さい子供にも寒さの厳しい中、森の動物や貧しい暮らしの子供の事を想像するように諭す場面で

は(『子供への教え』Part II)、単に慈善的に貧民の子供の世話をし、食べ物を与えるよう教えるのではなく、子供に有機的な社会の中の同じ構成員である者同士同情を持つように諭す点が特徴である。

こうしたバーボルドの『子供への教え』は彼女が弟のジョン・エイキンと共著で青少年向けに書いた『家庭での夕べ』(*Evenings at Home*, 1792-96)にも引き継がれる。全6巻にわたり出版されたこの作品では、毎晩家庭で両親や家庭教師が子供に社会についての知識や同じ社会の者に向けた愛情の持ち方を教える。

さてギaskell自身はバーボルドの少年少女向け教育書の影響を受けたことを、作品の中でどのように反映させているのであろうか。中編小説『荒野の家』(*The Moorland Cottage*, 1850)に上述の『家庭での夕べ』に触れている箇所がある。

“I am not sure whether, if you had been poor, you might not have fallen into an exactly parallel fault, and forgotten the trials of the rich. It is so difficult to understand the errors into which their position makes all men liable to fall. Do you remember a story in *Evenings at Home*, called the ‘Transmigration of Indra’? Well! when I was a child, I used to wish I might be transmigrated (is that the right word?) into an American slave-owner for a little while, just that I might understand how he must suffer, and be sorely puzzled, and pray and long to be freed from his odious wealth, till at last he grew hardened to its nature; the same reason. . . .” (55)

ここでギaskellは、「インドウラの輪廻転生」(“The Transmigrations of Indur [sic]”『家庭での夕べ』)に言及しているが、フランクとマギーが身分の違いにより陥る罪にも違いがあるかどうか語っている際、リスや野鴨、象や人間へと転生することのできる主人公のインドウラのように、アメリカの奴隷保持者になって罪悪感から生じる葛藤を味わってみたかった、と述懐する。奴隷を含む人間の平等性を重んじているギaskellの姿勢は、公平で有機的な社会の創造を理想としたバーボルドに通底するものである。

以上のようにバーボルドとギaskellには、ユニテリアン文化に根差した有機的な社会を理想とする共通点が見出されるが、そのような理想の社会観は、それぞれの作品における社会問題の扱いにも同様に反映されている。次に両作家に

とって共通に関心のあった貧困や労働という社会問題に対しての意識について考察し、その共通の特徴を探りたい。

ギaskellは小説での貧困や労働といった社会問題の扱い方について『メアリー・バートン』の序文で以下のように触れている。

It is enough to say, that this belief of the injustice and unkindness which they endure from their fellow-creatures, taints what might be resignation to God's will, and turns it to revenge, in too many of the poor uneducated factory-workers of Manchester. . . . I know nothing of Political Economy, or the theories of trade. I have tried to write truthfully; and if my accounts agree or clash with any system, the agreement or disagreement is unintentional. (7-8)

ギaskellはここで貧しい労働者たちへの愛情を示しつつも真実にもとづいて書くべきである、という理性的な創作態度について語っているが、興味深いことにこのような創作態度は、バーボルドの詩「貧しい者へ」(“To The Poor”, 1795)にも表れている。

「貧しい者へ」は、国教会派の牧師サムエル・グラス (Samuel Glasse) が 1795 年に書いた説教 (“A World of Comfort to the Poor, in Their Present Necessity”) で貧民に生活が苦しくても社会に歯向かうことなく、それを耐えることで天国での美德を積むよう指導し、宗教の教義で無理に貧民に現状を妥協させようとしたことへの反論として書かれたものである。

Child of distress, who meet'st the bitter scorn
Of fellow men to happier prospects born,
Doomed art and nature's various stores to see
Flow in full cups of joy,—and not for thee;
Who seest the rich, to heaven and fate resign'd,
Bear thy afflictions with a patient mind;
Whose bursting heart disdains unjust controul,
Who feel'st oppression's iron in thy soul,

Who drag'st the load of faint and feeble years,
Whose bread is anguish. . . . (1-10)

詩の冒頭でバーボルドは貧民に対する愛情を表している。更に、貧民が貧困に苦しむのを、社会の金持ちたちがこれも「天や運命の計らい」(5) とじっと何もせぬ様を描き、金持ちたちの無責任な様を批判している。貧民の魂は「抑圧の鎖」(8) につながれた奴隷同様の状態である。

ところが次行以下バーボルドの貧民に深く同情する態度が一変し、彼らに貧しさを耐えるようにと語りかける。

Bear, bear thy wrongs, fulfill thy destined hour,
Bend thy meek neck beneath the foot of power!
.....
Think not their threats can work thy future woe,
Nor deem the Lord above, like Lords below.
Safe in the bosom of that love repose
By whom the sun gives light, the ocean flows,
Prepare to meet a father undismayed,
Nor fear the God whom priests and kings have made. (11-12, 17-22)

一見するとこの詩は、前述のサムエル・グラスの貧民に現状を耐えて天国に徳を積みという説教と似ているが、地上では貧民は「安らぐ」ことはない、「天上の支配者」と「地上の支配者たち」(18-19) は同じではないと断言し、当時の地上の支配者たちである為政者たちを批判している点が大きく異なっている。解決策のない苦しみをバーボルドが忠実に描くことで、即解決できない問題の深刻さを読者の理性に訴えていると言えよう。

貧民の扱いにも共通点が見られる。「貧しい者へ」の詩で貧民が奴隷のように「抑圧者」(8) による苦しみを受けている様子が描かれていたが、『メアリー・バートン』でもそのような苦しみを彷彿させるように、労働者バートンが以下のように辛苦に覆われる。

The indigence and sufferings of the operatives induced a suspicion in their minds of many of them, that their legislators, their magistrates, their employers, and even the ministers of religion, were, in general, their oppressors and enemies. (Ch. 8, 75)

パートンにとって、雇用主のみならず政府、警察、聖職者らがみな「抑圧者」(75)であった。また次の箇所が示すように、彼の苦しみは雇用主とおなじ一つの世界を共有できないことだと述べる。

If I am out of work for weeks in the bad times, and winter comes, with black frost, and keen east wind, and there is no coal for the grate, and no clothes for the bed, and the thin bones are seen through the ragged clothes, does the rich man share his plenty with me . . . We're their slaves as long as we can work; we pile up their fortunes with the sweat of our brows, and yet we are to live as separate as if we were in two worlds. . . . (Ch. 1, 16) [下線部筆者]

パートンをはじめとする労働者と雇用主のそれぞれの世界の断絶は、「貧しい者へ」で貧民が金持ちたちの世界を垣間見ることができなかった様子(1-4)に類似している。

さらに労働者の団体(combination)のあり方についてもギaskellがバーボルドの考えを踏襲している面があると推察できる。バーボルドの時代に団結禁止法により労働団体結成は禁止されていた。労働者による賃金要求が社会の基礎を覆すものになると考えられたためである。しかしバーボルドは労働団体が存在すれば社会全体の利益や道義が保たれると逆説的にその存在を主張した。

Laws are continually made against combinations, but the secret combination of the low against the high can never be prevented, because it is founded on the interest of the many, and the moral sense of all. ("Thoughts" 352)

『メアリー・パートン』では以下の様に労働組合(combination)について、その

存在は決して否定されていない。ギヤスケルが労働組合を手放しで支持するわけではないが、以下の様に労働組合には理性・判断力にたけたリーダーの存在が必要だと述べているのが特徴である。

Combination is an awful power. It is like the equally mighty agency of steam; capable of almost unlimited good or evil. But to obtain a blessing on its labours, it must work under the direction of a high and intelligent will; incapable of being misled by passion or excitement. The will of the operatives had not been guided to the calmness of wisdom. (Ch. 15, 147)

ギヤスケルは労働組合を社会が排除することや、また逆に労働者が過熱した労働争議で大胆な社会変革を引き起こすことではなく、対立がありながらも労使相互が理性的判断のもとに行う変革を待望していた。また、労働者と雇用主の軋轢を解決する方法について雇用主であるカーソン氏は、労使相互が尊敬し愛情を持つこと、相互の利益を考慮することが大事だと述べている（320）。この思想はバーボルドが訴えた社会改革への展望と同じ視点を持つ。以下の抜粋がバーボルドの貧富の問題への改革姿勢を示す。

The rich cannot seek the poor without beneficial effects to both parties. The best leveling principle is that philanthropy which is continually at work to smooth and soften the too great inequalities of life, and to present the eye, instead of proud summits and abrupt precipices, with the gentler undulations of hill and vale, with eminences of gradual ascent, and humble but happy vallies. (“Thoughts” 355-56)

貧富格差を是正するためには、風景でたとえるなら突出して切り立った断崖のような激しさではなく、緩やかに実現すべきであると、保守的改革の意識を示している。

ユニテリアンが、世界そのものを体系立てて学び、なおかつ社会を有機的にとらえようとしたことを重要視したのを鑑みれば、ギヤスケルが望み見ているのは、人々が対立がある現実を冷静に認め、労使相互の緊張を保ちつつも愛情で結ばれ

一体化した社会であると考えられる。

What thoughtful heart can look into this gulf
That darkly yawns 'twixt rich and poor,
And not find food for saddest meditation!
Can see, without a pang of keenest grief,
Then fiercely battling (like some natural foes)
Whom God had made, with help and sympathy,
To stand as brothers, side by side, united!
Where is the wisdom that shall bridge this gulf,
And bind them once again in trust and love? (Ch.15, 143)

この詩のようにギヤスケルは労使の隔たりを信頼と愛で埋めようとしたが、これはまさにバーボルドが児童向け教育でも目指した、まとまりのある有機的社会の構図に合致している。ギヤスケルとバーボルドを結ぶユニテリアン女性作家の文学的なつながりがここに見られる。

以上のように本論文では、論文最初に述べた、グリードルらによるユニテリアン女性作家らがその作品を通して当時の社会改革に寄与しようとした共通点があるという指摘をもとに、ギヤスケルとバーボルドそれぞれの作品の中で、同じユニテリアン女性作家としてどのような共通点が見られるかを論じた。その結果、社会問題を包括する文学的批評媒体として開花したギヤスケルの小説とバーボルドの作品との間にその理想とする社会像や創作の理念において、重要な連続性が見出されることを指摘した。バーボルドの、児童書『子供への教え』や、社会に向けて書かれた論説「社会的地位の不均等への考察」などは革新性を持っていたと考えられるが、そのような社会問題についての理念はギヤスケルの社会小説にも継承されていることが検証された。

注

本稿は日本ギヤスケル協会第24回例会（2012年6月2日、於日本大学）にお

ける研究発表「ヴィクトリア朝とアナ・バーボルド —— 『メアリー・バートン』を中心に」に基づいている。

1. White (35), James, *Religious* (1-27), Stoneman (134) とも同様に主張している。

引用文献

(The poems of Barbauld in this thesis are all sourced from Barbauld, Anna Letitia, *Anna Letitia Barbauld: Selected Poetry and Prose*. Ed. William McCarthy and Elizabeth Kraft. Toronto: Broadview, 2002.)

Aikin, John and Anna Letitia Barbauld. *Evenings at Home; or, the Juvenile Budget Opened: Consisting of a Variety of Miscellaneous Pieces for the Instruction and Amusement of Young Persons*. 2 vols. Bristol: Thoemmes, 2003.

Barbauld, Anna. *Anna Letitia Barbauld: Selected Poetry and Prose*. Ed. William McCarthy and Elizabeth Kraft. Toronto: Broadview, 2002.

—. *Lessons for Children*. London: Printed and sold by J. F. Dove. [n.d.]

—. “Thoughts on the Inequality of Conditions.” 1807. *Anna Letitia Barbauld: Selected Poetry and Prose*. Ed. William McCarthy and Elizabeth Kraft. Toronto: Broadview, 2002. 345-55.

Chapple, J. A. V. *Elizabeth Gaskell: The Early Years*. Manchester: Manchester UP, 1997.

Easson, Angus. *Elizabeth Gaskell*. London: Routledge, 1979.

Gaskell, Elizabeth. *Mary Barton: A Tale of Manchester Life. The Works of Elizabeth Gaskell*. Ed. Joanne Wilkes. Vol. 5. London: Pickering, 2005. 5 vols.

—. *The Moorland Cottage. The Works of Elizabeth Gaskell*. Ed. Joanne Wilkes. Vol. 2. London: Pickering, 2005. 5 vols.

Glasse, Samuel. *A Word of Comfort to the Poor, in Their Present Necessity*. 1795. *Eighteenth Century Collections Online*. 10 Aug. 2010.

Gleadle, Kathryn. *British Women in the Nineteenth Century*. London: Palgrave, 2001.

James, Felicity. “Religious Dissent and the Aikin-Barbauld Circle, 1740-1860: an

- Introduction.” *Religious Dissent and the Aikin-Barbauld Circle 1740-1860*. Ed. Felicity James and Ian Inkster. Cambridge: Cambridge UP, 2012. 1-27.
- Stoneman, Patsy. “Gaskell, Gender and the Family.” Matus, Jill L., ed. *The Cambridge Companion to Elizabeth Gaskell*. Cambridge: Cambridge UP, 2007. 131-47.
- Watts, Ruth. *Gender, Power and the Unitarians in England 1760-1860*. London: Longman, 1998.
- White, Daniel E. *Early Romanticism and Religious Dissent*. Cambridge: Cambridge UP, 2006.

(慶應義塾大学非常勤講師)

Abstract

Portrayal of Society by Elizabeth Gaskell and Anna Barbauld: Similarities of the Unitarian Female Writers

Yuko OTA

My thesis will analyze works of Gaskell and discuss the possibilities of the cultural and literary influence of Anna Barbauld's (1743–1825) philosophy on Gaskell's works. Barbauld is an early prominent, dissenting Romantic writer whose works are appreciated today.

Recently, critics on British Rational Dissenters of the late eighteenth to early nineteenth century (such as Daniel E. White, Jon Mee, or Felicity James) have pointed out that a strong literary connection existed among Unitarian women writers such as Barbauld, Harriet Martineau, and Gaskell. Several decades earlier than Gaskell, Barbauld had played a significant role in forming the cultural and social opinion in her times.

Being born in a middle-class Unitarian family, Gaskell read Barbauld's *Lessons for Children* in her early years (J. A. V. Chapple; Angus Easson). Gaskell's Preface to *Mary Barton* reminds its readers of Barbauld's combination of affectionate eyes for the peripheral beings in the society and the rational description of reality represented in the poem "To the Poor." I would argue that the works of both Gaskell and Barbauld reflect the philosophy of organic unity of society. The treatment of the labour union and capitalists in Barbauld's political discourses highly suggests the possibilities that Gaskell inherited the philosophy relating to the lower class in the society that Barbauld maintained in the early Romantic period.